筆筆木筆で描く不思議のらかんたち

草画帖 43

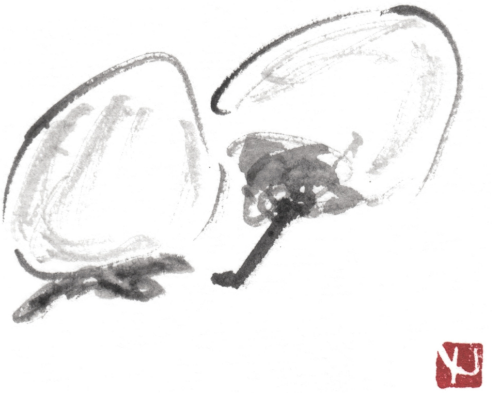
柿

号

柿号です。
筆柿というれしい品種もあり。

柿若葉伊那の井月（せいげつ）ごろ寢して

柿紅葉良寛めしを食ひ終はる



小枝筆。柿は花も、葉も、実も宜し。

柿色の人恋しさもありぬべし

小枝筆。鳥に生まれてもやはり柿を愛するだろう。

新芽を着けた小枝筆。若葉の頃は旅もみずみずしい。

美しい星

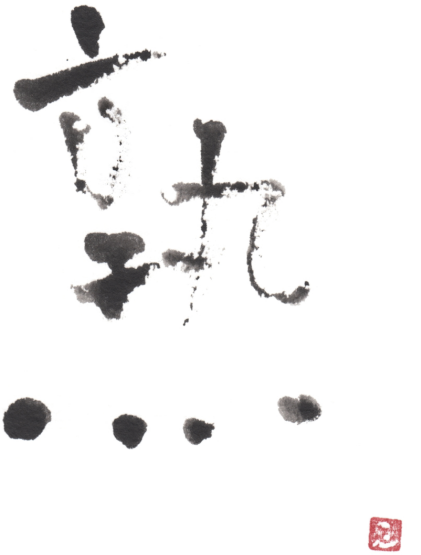
冬の夕暮
太陽は沈んだばかりで
空は淡いグラデーション
うす墨で
ところどころに
素朴な動物を散らしたような雲
かれらの行くてに
ぽってりとした白い月

ポケットには
おおきなまつぼくり
裂けた椿の実
ゆき違うこどもからもらった
あいさつの言葉

アア
コノ星ハステキダ
美シイ呼吸ノ
驚クベキ星ニボクハイル
……と
故郷の星に伝えたくなった

筆柿の果柄はきゅるきゅると鳴く筆。いい子守歌であったか。

筆柿の果柄筆。萼にも薄墨がついて同時に二本の線。不思議な絵に。



筆柿を筆にして、筆柿の書きたいであろう一字を。

筆柿で描いた夢籠風羅図。深々と熟せば、甘きもよし、渋きもよし。

筆柿で描いた筆柿。自画像のようなものか。

草話

昔住んだ家に柿の木があった。ある日、中学校の図画教師が授業に使いたいと幾つか捥いでいった。渋柿だと聞いていたのが、写生後噛った生徒によると甘柿だったらしい。

＊

秋の紅葉は美しい。道路に散り敷いた景も自然の美観。そうは思っても街中では苦情がくる。柿の落葉を掃こうと表に出て、あまり見事な色模様に一枚一枚見入りながら拾い集めたことがある。

その頃、星に夢中で、夜々、あの星この星と巡って、宇宙とは何か何処か、風羅とは何か誰か、そんなことをぐるぐる考え廻していた。それが柿の葉を眺めていて、ふと、そうなのか、と合点した。

宇宙の最新が、現在形が、この紅葉なのだ、この刻なのだ。

柿 紅 葉 し て 円 熟 の 惑 星 期

しばらくしてこんな句が生まれた。

＊

柿の木はその翌年伐採された。大家が苦情を受けて公孫樹共々処分した。植木屋はいい樹だとほめた。樹齢百五十年。公孫樹は三十年。

＊

柿と言えば、忘れられない一書がある。木箱に収められた画帖で、いろんな客の揮毫した絵や詩句で埋まっていた。いずれも主家の庭の柿を讃えたもの。その名木に寿命がきて、木箱はその形見の材でこしらえたとか。

柿の葉舟

俳句 白山鳥翁 ／ 絵 艸々子 ／ 詩 泉井小太郎

草画帖 第43号 2021年11月25日 泉井小太郎編集 六角文庫発行
〒675-2312 兵庫県加西市北条町北条1039　Tel 0790-42-6008